

河川入門講座 (8)

河川の流水の使用 (その2)

公益社団法人全国防災協会 理事 松田 芳夫



水利権の許可と一口に言っても、実際の審査とその考え方は技術的、社会的に複雑ですが、出来るだけ要点をお話しします。

まず、わが国の河川の流水は季節的に大きく変動するので、河川の流水の量（流量）がどういう状態の時を基準にして考えるかが難しい問題です。

渇水期で河川水の流量が少ないときは、既に取水の権利を持っている水利権者でも取水できないこともありますし、流量の多い洪水時に好きなだけ取っていいと言われても困ります。

現在の水利権行政では10年に1度の渇水流量（基準渇水流量）を基準にしています。

あの大河の利根川といえども渇水流量というと中流部でわずか毎秒80～100立方メートルくらいしかありません。

水資源として安定的に利用できる河川の流水は雨量の豊富なわが国でもそう大きいものではないのです。

しかも河川からの取水は、古くから稲作に不可欠な農業用水として長い歴史があり、河川法が制定された明治中期の時点で、農業開発の進んだ大河川では既に渇水流量を使い尽くしており、新規の水利用の割り込む余地は殆ど無かったといわれています。

そのような状況下で近代に至り、水道、発電、工業用水などの新しい水需要が発生したので水争いは深刻化したわけです。

河川の流水は水利用に取水されるばかりではなく、魚類をはじめ水棲生物にとっても不可欠な存在ですし、景観や舟航のためにも必要です。

このような河川本来の機能の維持のために必要な

流水を“河川維持流量”といいこれに既得の水利権者の取水量とを合わせたものを“正常流量”と呼んでいます。

河川管理上の支障や既得の取水者とのトラブルを発生させることなく、新しく水利権を設定するには、基準渇水流量から正常流量を引いてさらに余裕がある場合に限られることになります。

今のわが国の河川では、既に取水が大巾に進み、渇水時には河川維持流量の確保もままならぬような有様ですから、新規の水利権の設定は著しく困難なのです。

この難問に対処する方法がダムによる貯水です。

洪水時の流水をダム湖に溜めておき、必要時に放流したものを下流で取水するという原理ですが、ダム建設をめぐる集落移転、自然環境破壊など多くの難問が新しく発生しました。

現在では治水目的の洪水調節機能とをあわせ持つ“多目的ダム”の建設が殆んど唯一の解となっています。

新規の水利権は多目的ダム事業に参画することによって取得できるというのが一般的です。

水利行政の今後の課題として取水の安定性と確実性の確保があります。

今の水利権は10年に1度の渇水流量を基準にしているのですから、平均的にも10年に1度は取水できず節水や断水の可能性があります。地球温暖化や異常気象のせい、近頃は、渇水が数年に1度と頻度が増しているようです。

今後は取水量の名目上の確保ではなく、取水量を減らしても渇水に対する安全性の向上を図る対策が必要になるものと思われます。